中部大学教育研究
（抜刷：pp.69-80）

Journal of Chubu University Education

No. 21
2021

【実践研究・実践報告】
「特別支援学校教職インターンシップ」自己評価シートの作成 …… 古市真智子・伊藤佐奈美

【Practical Reports】
Proposal of Self- Assessment Items for
"Internship for Teachers at Schools for Special Needs Education"
…… FURUICHI Machiko and ITO Sanami

「特別支援学校教職インターンシップ」自己評価シートの作成

古市真智子[*1]・伊藤佐奈美[*2]

要　旨

現代教育学科では、課外活動として「特別支援学校教職インターンシップ」を実施している。本稿は、本活動における「自己評価シート」を作成した経過を報告したものである。

特別支援学校の特徴やこれまでの学生の学びの成果から、本活動における「活動目標－自己評価の項目」及び「着目点」を検討した。その結果、「活動目標－自己評価の項目」には、＜ｱ.特別支援学校の教員として働くことの意味や意義を考える＞＜ｲ.学校における教員の役割に対する理解を深める＞＜ｳ.教員の特徴的な職務に対する理解を深める＞＜ｴ.児童生徒への指導のあり方について理解を深める＞など14項目が提案された。また、「児童生徒の自立、生活レベルの向上を目指した支援」「児童生徒の成長を促すための活動・感情の共有」といった「着目点」が項目ごとに示された。これらの「活動目標－自己評価の項目」及び「着目点」を用いて「特別支援学校教職インターンシップ」独自の自己評価シートが作成された。

キーワード

教職インターンシップ、学校インターンシップ、特別支援学校教員養成、自己評価項目

1　はじめに

本学科では、「特別支援学校教職インターンシップ」を2017年度から実施している。2019年度の教育職員免許法の改正・施行により、「学校体験活動（学校インターンシップ）」は、教職課程の「教職に関する科目」に含めることができるようになったが、本学科では課外活動として継続している。特別支援学校で、３年次の秋学期に毎週１日、約10日間の活動が行われる。

古市・伊藤（2019）では、「特別支援学校教職インターンシップ（以下、特支インターンと略す）」の意義と課題について、学生の活動報告書とインタビュー調査、受け入れ校へのアンケート調査から検討した。その結果、「特支インターン」の意義として、「特別支援学校特有の内容や雰囲気をつかむ」「障害のある児童生徒への理解と指導の方法を学ぶ」「特別支援学校の仕事を知る」「障害や特別支援に関する学習意欲の向上」「初めてのことを経験する」の５つが見出され、学生に良い変化が起こることも確認された。一方課題として、インターンシップに求める内容や水準などに関して、個人の意識の差や戸惑いがみられることが明らかとなり、今後はこれらを学生、受け入れ校、大学間で共有することが必要であることが示された。

古市・伊藤（2020）では、「特支インターン」における学びの成果を学生の自己評価によって検討した。自己評価の項目には、小学校教員養成課程における「学校を体験する活動」の目的に関する14項目（峯村，2019）を、自己評価用に表現を変更して使用した（**表１**）。なお、峯村（2019）の項目は、各大学の小学校教員養成課程における「学校を体験する活動」のシラバスと、中央教育審議会の「学校体験活動」の目的等に関する内容（2012，2015）から作成されている。学生には、各項目について達成したと思うか否かを４段階でたずねた。その結果、「ｲ 学校における教師の役割」「ｳ 教師の職務全般に対する理解」「ｵ 児童生徒理解」「ｺ 学校現場の雰囲気」「ｼ 教育実習に接続する活動としての学校現場」では達成度が高かった。しかし、「ｴ 児童生徒指導」「ｶ 学級経営」「ｷ 特別活動」「ｸ 教科指導」「ｹ 実践的な指導力の醸成」「ｽ 自らの教員としての適格性を把握する機会」では達成度が低く、これらの項目については十分な学びが得られていないことが示唆された。

達成度が低かった項目についてその要因を検討すると、ひとつには、特別支援学校における科目や活動の内容、その取り扱いに関する知識・理解不足が考えられる。また用いられた項目が小学校での活動を想定して作られたものであったことから、達成度が低かった項目は「特支インターン」の目的として適合しない可能性も考えられる。これらの結果を踏まえ、指導内容

＊1 現代教育学部　現代教育学科　准教授
＊2 現代教育学部　現代教育学科　教授

や方法、活動・評価項目の見直しを図る必要がある。

そこで本稿では、特別支援学校に照準を合わせたインターンシップの「活動目標－自己評価の項目」と「着目点」を検討し、「特別支援学校教職インターンシップ活動目標－自己評価シート（以下、「評価シート」）」を作成する。特別支援学校の特徴やこれまでの「特支インターン」の学びの成果を反映させた独自の「評価シート」を学生や受け入れ校に事前に提示することで、学生、受け入れ校、大学間で活動に対する意識が共有され、より多くの学びの成果を得ることが期待できる。

表１　小学校における「学校を体験する活動」の目的に基づく自己評価項目（古市・伊藤，2020）

ｱ 教師の意味や教師として働くことの意義が理解できた
ｲ 学校における教師の役割に対する理解が深まった
ｳ 教師の職務全般に対する理解が深まった
ｴ 教師が行う児童生徒指導に対する理解が深まった
ｵ 児童生徒理解が深まった
ｶ 学級経営に関する理解が深まった
ｷ 特別活動に対する理解が深まった
ｸ 教科指導に対する理解が深まった
ｹ 実践的な指導力を醸成することができた
ｺ 学校現場の雰囲気を感じることができた
ｻ この実習で体験したことを他の教職科目で活用することができた
ｼ 教育実習に接続する活動として学校現場をあらかじめ理解できた
ｽ 自らの教員としての適格性を把握する機会となった
ｾ 地域や保護者との連携の重要性を理解できた

2　方法

①分析対象

2017年度～2020年度「特支インターン」参加学生56名（2017年度11名、2018年度18名、2019年度７名、2020年度20名）の「活動報告書」を分析対象とする。

②「活動報告書」について

インターンシップに参加するにあたり、大学から事前に配付された「活動報告書」（Ａ４　１枚）である。約10日間のインターンシップ活動日の最終日に、自由に記述し受け入れ校に提出する。

なお、2020年度は、新型コロナウイルスの影響により活動内容及び日程に大幅な変更があった。

③抽出作業

「活動報告書」の記述のうち、「学び」の報告と判断される内容を抽出した。「わからなかった」「できなかった」という趣旨の内容についても、「学び」のひとつの結果として採用した。その結果、205のセンテンスが抽出された。なお、記述内容は主旨を損なわない程度に要約、表現の変更を施している。また、活動場面が明記されている場合には文末に〔　〕で示す。

④分類

抽出された記述を、峯村（2019）による小学校における「学校を体験する活動」の目的の14項目のうち、最も当てはまると考えられる項目に分類し、さらに類似した内容ごとに①～に分類する。

3　結果と考察

抽出された「学び」の記述と分類の結果を**表２**に示す。項目ごとに「特支インターン」の特徴及び学生の学びの成果を反映させた「活動目標－自己評価の項目」を検討する。また、小分類に基づき「着目点」を検討する。

ｱ 教師の意味や教師として働くことの意義を理解する

本項目にちょうど当てはまる記述はなかったが、近い内容として、「実習を重ねるにつれて、人が生きる意味、障害者が生きる意味を考えるようになった。これからも考え続けていきたい」との記述があった。今回、この項目に該当すると考えられる記述は１件のみであるが、古市・伊藤（2020）の調査では、半数以上の学生が達成したと回答しており、またその理由やきっかけとしても適当な回答があった項目である。このことから、本項目については、特別支援学校では学びが得られにくい内容ということではなく、「活動報告書」には記述されにくい内容であると考えられる。

「特支インターン」の参加学生は、すでに小学校教育実習やその前段階で小学校での「学校を体験する活動」等を経験してきているため、本項目が示す「教師」とは、「特別支援学校の教員」と特定できる。特別支援学校の教員の意味や教員として働くことの意義を考える際、対象が「障害のある子ども」と限定されることで、この学生の記述が示すように、障害を抱えて生きていくということ、ひいては人が生きる意味といったような根源的なことに対する自分自身の考えを見つめることになるだろう。このような問いに対しては、端的に言葉でまとめたり、理解できたか否かを評価したりすることよりも、この学生のように「考え続けたい」と思えることが重要であろう。

そこで、本項目は「ｱ 特別支援学校の教員として働くことの意味や意義を考える」と変更する。

ｲ 学校における教師の役割に対する理解を深める

特別支援学校における教員の役割に対する理解について、①児童生徒の自立、生活レベルの向上を目指した支援 ②児童生徒の成長を促すための活動・感情の共有、に関する記述がみられた。①では、「社会で自立して生活をする能力の育成に重点を置いている」「全て介助するのではなく少しの介助でできることを

目指し、自立支援をする」といったように、個々の状態を把握し、生活レベルの向上や自立に向けて個々に合わせた支援を考えていく教員の姿がとらえられている。また、②では、「実習中の立ち仕事では、教員も座ることなく見本を示していた」「生活や活動を教員も一緒に楽しみ、子どもをほめて伸ばす」といったように、活動を一緒に楽しんだり、ほめたり、見本となったりしながら、活動を共にすることで子どもを伸ばそうとする教員の姿が感じとられている。

特別支援学校の教員の特徴がよくとらえられており、記述も一定数みられることから、この項目はこのまま適用できる。着目点として、「児童生徒の自立、生活レベルの向上を目指した支援」「児童生徒の成長を促すための活動・感情の共有」の 2 点があげられる。

ｳ 教師の職務全般に対する理解を深める

特別支援学校の教員の職務に対する理解について、①日常生活の補助・介助 ②教材教具、補助具等の準備 ③児童生徒の状態を常に把握 ④教員間の連携の重要性、に関する記述がみられた。①②は移動の付き添いやトイレ介助、授業に必要な器具の準備といった、児童生徒の補助や介助に関する具体的な職務である。③④では、「子どもの小さな変化にも細心の注意を払うことが信頼関係につながっている」「事前の打ち合わせ、子どもの情報共有など教員間の連携の重要性を感じた」といったように、教員が連携して皆で常に子どもの状態を把握し対応できるように備えることの重要性が理解されており、職責といった観点からとらえられている。

特別支援学校の教員の職務の特徴が多面的にとらえられていることから、この項目は「ｳ 教員の特徴的な職務に対する理解を深める」と変更する。着目点として「日常生活の補助・介助」「教材教具、補助具等の準備」「児童生徒の状態を常に把握」「教員間の連携の重要性」の 4 つがあげられる。

ｴ 教師が行う児童生徒指導に対する理解を深める

古市・伊藤（2020）では達成度の低かった項目であるが、「児童生徒指導」の意味解釈に問題があった可能性がある。一般的に児童生徒指導という用語は、非行や不適切な言動など生活場面における問題行動に対する教員の指導や対応が連想される。「児童生徒指導」をこのようにとらえると、特別支援学校では該当する場面はほとんどないと考えられる。しかし、『生徒指導提要』（文部科学省，2010）によれば、児童生徒指導とは、「一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動」のことであり、教員が児童生徒の成長発達を促したり支えたりするための働きかけはすべて児童生徒指導といえる。そこで、本項目では、「児童生徒指導」を本来の意味でとらえたうえで該当すると判断できる記述を分類した。なお、授業や教科指導における具体的な活動に限定された記述は、「学習指導」として「児童生徒指導」と区別し、後述する「ｸ 教科の指導」の項目で扱うこととする。

このように分類すると、特別支援学校の教員が行う児童生徒指導に対する理解について、①児童生徒が前向きに楽しく取り組めるかかわり方 ②実態把握と個々に応じた指導の重要性 ③信頼関係の構築の必要性 ④過剰な支援をせず見守る姿勢の重要性 に関する記述がみられた。①②③では、「子どもたちが前向きに取り組むことができるようなかかわり方や声かけの難しさを痛感した」「生徒の実態を把握し、理解したうえでそれに応じた指導をする必要がある」「支援をする前に子どもに声をかけることが信頼関係構築に必要と教わった」など、指導の前提として、個々の実態に合わせて子どもの気持ちを大切にしながらかかわり信頼関係を築くことが必要であることが示されている。そのうえで、④では、「できるという体験が大切」「ゆっくり見守る」など障害のある子どもへの指導のあり方に関する基本的方針がとらえられている。

これらの結果から、本項目は「ｴ 児童生徒への指導のあり方について理解を深める」と変更する。着目点として「児童生徒が前向きに楽しく取り組めるかかわり方」「実態把握と個々に応じた指導の重要性」「信頼関係の構築の必要性」「過剰な支援をせず見守る姿勢の重要性」の 4 つがあげられる。

ｵ 児童生徒理解を深める

ここでは、児童生徒理解が深まったという旨の記述の他、理解が困難であったという場合も学びの成果と判断して含めた。また、児童生徒と人間関係を築こうとする様子がわかる記述もここに分類した。

その結果、児童生徒理解について、①個々の違いへの気づき ②児童生徒が達成感を得られる適度なサポートの判断 ③接し方に対する困惑、模索 ④積極的なかかわりの結果としての関係性の構築 に関する記述がみられた。①②では、「生徒個々に集中力やスピードに差がある」「子どもたちが自分でできることとサポートが必要なこととの判断の難しさを実感した」「出来たことを褒める、達成感が児童の成長や次の活動につながると感じた」というように、児童生徒の個々の違いに気づき、個々が達成感を味わえるように適切な支援の程度を見極めようとする様子が示されている。また、③④では、「子どもの感情が分からず、結局答えは分からなかった」「初めは話が続かず馴染めなかっ

たが、積極的にかかわることで信頼関係を築くことができた」など、最初はどのようにかかわればよいのかわからず戸惑う状態から、積極的にかかわることによって徐々にわかってくる様子や、最後まで理解が困難といった様子がうかがえる。

特別支援学校においては、能力や行動などさまざまなことにおいて個々の違いが大きく、十分な理解に至ることは困難である。インターンシップでは、個々に違いがあることに気づき、一人一人とコミュニケーションをとり信頼関係を築こうとするなど、積極的に理解しようとする行動をとることが重要である。

そこで本項目は、「ｵ 児童生徒の理解に努める」と変更する。着目点として「個々の違いへの気づき」「児童生徒が達成感を得られる適度なサポートの判断」「接し方に対する困惑、模索」「積極的なかかわりの結果としての関係性の構築」の 4 つがあげられる。

ｶ 学級経営に関する理解を深める

学級経営に関する理解については、①子どもの実態に応じた学習環境づくり ②教員－子どもとのクラスの雰囲気づくり に関する記述がみられた。①は、「普通学校と比べて安全配慮や環境整備など多くの配慮が行われている」など、主として物的な環境づくりへの気づきである。②は、「先生同士の連携が大切。担任・副担任・介護員のそれぞれの目から子ども理解に努めることがクラスの良い雰囲気作りにつながる」など、人的な環境づくりへの気づきである。

峯山（2019）の調査では、この項目を目的にしている大学は少なく、古市・伊藤（2020）でも達成度の低かった項目である。インターンシップでは学びが得られにくい内容であることも考えられるが、上述のようなこれまでの学生の学びの成果から、特別支援学校の学級経営について、物的環境、人的環境づくりといった面から学べることも期待できる。

そこで本項目は、「ｶ 学級の環境づくりに関する理解を深める」と変更する。着目点として「子どもの実態に応じた学習環境づくり」「教員－子どもとのクラスの雰囲気づくり」の 2 点があげられる。

ｷ 特別活動に対する理解を深める

峯村（2019）の結果では、この項目を目的にしている大学は少なく、古市・伊藤（2020）でも達成度の低かった項目である。達成度が低かった要因として、「特別活動」の時間が少ないことや、特別支援学校における「特別活動」に関する事前の知識・理解不足が考えられる。

特別支援学校における「特別活動」には、不定期の学年・学級活動や学校行事関連の活動の他、定期的な「朝の活動」や「朝の会」が含まれるが、これらは「日常生活の指導」など他の科目や活動との明確な区切りがない場合も多い。そこでここでは、単独で「特別活動」として取り出せる活動や「特別活動」を主として行われていると判断できる活動に関する記述のみを分類した。その結果、①学級活動 ②学校行事 ③課外・クラブ活動 に関する記述がみられた。①②は具体的な「特別活動」の内容、③はコロナ対策による代替措置として行われたスポーツ体験の感想によるものである。

今後は、このように「特別活動」として取り出せる時間に行われている具体的な内容だけでなく、他の科目や活動との関連や、活動のねらいや特徴などについても理解を促進していくことが必要であろう。まずは、特別支援学校における「特別活動」の内容について、意識的、積極的に情報を収集するといった姿勢が求められる。

そこで本項目は、「ｷ 特別活動の内容を理解する」と変更する。着目点として「学級活動（他の科目、活動との複合的なものを含む）」「学校行事」「課外・クラブ活動」の 3 つがあげられる。

ｸ 教科指導に対する理解を深める

特別支援学校の教育課程では、通常の学校における「教科」（国語、算数など）と並び、「各教科等を合わせた指導」（〔日常生活の指導〕、〔遊びの指導〕、〔生活単元学習〕）や「領域」（〔特別活動〕、〔自立活動〕など）といった授業時間も多い。そこで本項目の「教科指導」を「授業における指導」として解釈することとする。古市・伊藤（2020）で達成度の低かった項目であるが、このような範囲で該当する記述を分類したところ、最も多くの記述がこの項目に該当した。なお、教科等の科目名が明記されていた記述については、文末に〔 〕で記している。

授業における指導に対する理解として、①わかりやすい教材の工夫 ②子どもの関心を引く指導方法の工夫 ③授業内容の工夫 ④習熟度別、特性や能力に合わせた内容・工夫 ⑤教科、領域、各教科等を合わせた指導の特徴に関する理解 に関する記述がみられた。全般的に、個々の能力に合わせ、子どもの立場にたった教材、方法、内容への気づきが述べられている。①②では「視覚的支援」「音楽を取り入れる」「遊びを取り入れる」など教材や指導における具体的な工夫、③では「できるという達成感」「習慣づくり」「安全への配慮」といった指導上大切にされている方針や態度について多くの学びがみられる。また、④⑤では、習熟度別のクラス分けや〔生活単元学習〕〔自立活動〕〔作業学習〕〔給食〕といった「各教科等を合わせた指導」

や「領域」など、特別支援学校特有の授業内容・方法を実際に経験して理解を深めているようすがうかがえる。

そこで本項目は、「ｸ 授業の内容や方法に対する理解を深める」と変更する。着目点として「わかりやすい教材の工夫」「子どもの関心を引く指導方法の工夫」「授業内容の工夫」「習熟度別、特性や能力に合わせた内容・工夫」「教科、領域、各教科等を合わせた指導の特徴に関する理解」の 5 点があげられる。

ｹ 実践的な指導力を醸成する

実践的な指導力を醸成することについて、①効果的で適度な指示・支援のあり方 ②補助・介助等の技術 に関する記述がみられた。①では、「もう少しでできそうな子、挫けそうな子には手を貸すのではなく、声かけや待つ時間が大切だと学んだ」「子どもの視界に入り、やるべきことを描いて指示すると伝わりやすい」といったさまざまなかかわり方を学んだ」など、個々の状態に合わせて声のかけ方や指示の仕方を変えてみたり、タイミングや待つ時間が大切なことを実感したりしながら、効果的な指示の出し方や適度な支援が考えられていく様子が記されている。②では、車いすの操作や身辺介護の留意点が記されており、実際に体験することで具体的で実践的な学びを得ている様子がわかる。

記述を分類すると、上記のように多くの学びがみられているが、古市・伊藤（2020）では達成度の低かった項目である。これは、実践的な指導力が身に付いたと自身で評価するレベルにまでは達していなかったためであると考えられる。「特支インターン」では、初めてのことを広く経験すること、初めてでも実践してみることに意義があり、このこと自体を重視したいと考えている。

そこで本項目は、「ｹ 実践的な指導の方法を経験する」と変更する。着目点として、「効果的で適度な指示・支援のあり方」「補助・介助等の工夫」の 2 点があげられる。

ｺ 学校現場の雰囲気を感じる

学校現場の雰囲気を感じることについて、①登校時の雰囲気 ②教員、児童生徒の雰囲気 ③教育方針 ④特別支援学校の特色に関する情報、知見、感想 に関する記述がみられた。①の登校時は、「一日の始まりはスクールバスで登校する生徒を出迎え、教室に一緒に行くこと」との記述にみられるように、特に特別支援学校の雰囲気が感じられる場面のひとつである。また、②③では、「子どもたちに対し明るく元気に振る舞う先生が多い」「挨拶にとても重点を置いていることがわかった。廊下ですれ違う時、掃除のときなど挨拶を欠かさず、社会で生活する力を重点として指導していることがわかった」など、教員や児童生徒から作られる特別支援学校全体の雰囲気がとらえられている。④では学校の構造や一日の流れについて、通常の学校との違いを意識した気づきが述べられており、さまざまな視点から特別支援学校の特徴がよくとらえられている。

「特支インターン」に参加する学生の大半は、特別支援学校という場に初めて入るため、さまざまな初めての経験の中で、その雰囲気をつかんでくることは「特支インターン」の最大の意義の一つである。古市・伊藤（2020）の学生による自己評価でも回答者全員が達成したとしており、本項目は学生の活動や意識の中心となっていると考えられ、このまま適用できる。着目点として「登校時の雰囲気」「教員、児童生徒の雰囲気」「教育方針」「特別支援学校の特色に関する情報、知見、感想」の 4 点があげられる。

ｻ この実習で体験したことを他の教職科目で活用する

ここでは、「他の教職科目」への活用を意識した記述はなかったため、今後の活動全般への活用を意識した内容を分類した。

その結果、①今後の活動への意欲 ②自分自身の成長の実感 に関する記述がみられた。「特支インターン」は 3 年生の秋学期での実施のため、本項目が示すように「他の教職科目」となると 4 年生開講科目が該当することになる。これらの科目を事前に提示しておくことで意識して取り組める可能性もあるが、4 年生の開講科目は少ないうえに未受講の科目でどのように活用できるのかをイメージすることは困難であろう。そこで、インターンシップの体験を他の教職科目に限定せず、なんらかの今後の活動につなげることが意識されていればよいと考えられる。

しかしながら記述内容をみると、具体的に「知的障害のある子ども達とかかわる経験はとても良い経験になった」「言葉のない子どもたちとコミュニケーションをとる経験が私自身の大きな成長になった」といった記述も見られるものの、どのような経験をどのような活動に活かしていけるのかはほとんど具体的には書かれていない。これらを具体的に記述できるように指導していくことが今後の課題である。

本項目は、「ｻ この実習で得た体験を今後の活動に活かす」と変更する。着目点として「今後の活動への意欲」「自分自身の成長の実感」の 2 点があげられる。

ｼ 教育実習に接続する活動として学校現場をあらかじめ理解する

ここでは教育実習を意識していると判断できるものを分類したところ、該当するのは5件のみであった。実際には、「特支インターン」が教育実習の事前活動の一環であることは自明であることから、本項目は他の項目の上位項目ともいえ、他の項目に分類されているものも多いと考えられる。古市・伊藤（2020）の調査でも7名中5名が達成したと回答していることからも、同様に考えられる。

この項目には、「見守る・声をかける中心の支援になってしまったことが反省点。もっと周りをよく見て、身体誘導ができるように改善する」といったように、教育実習までの具体的な課題の発見や意欲が述べられることが期待できる。

そこで、本項目は「ｼ 教育実習に向けた課題を見つけ、意欲を高める」と変更する。

ｽ 自らの教員としての適格性を把握する

古市・伊藤（2020）では達成度の低かった項目である。教員としての適格性に関する直接的な記述は見当たらなかったため、教員となるための課題や反省、意欲、目標などについて言及されているものを分類した。その結果、①教員を目指すうえでの反省、今後への意欲 ②教員の楽しさ、やりがいの再確認 ③目指す教員像、教員に必要な資質の把握 に関する記述がみられた。

①では「特別支援教育に関する知識不足を痛感。実習で学んだことを活かし、学習を進めたい」といったように、反省から今後の意欲へとつながる記述がみられる。②では「回を重ねるごとに子どもたちの性格が分かり、ふれあう機会が増え、一人一人と向き合いたいという意欲が大きくなった」「毎週の実習で生徒とかかわり笑顔になるのを見て、この職の素晴らしさを体感した」など教員になることの意欲を高めている様子、③では「先生方のように深い愛情を注ぎ、子どもの自信を育めるような教員を目指す」など、具体的な教員像や必要な資質についての記述がみられる。

いずれの記述も適格性を把握するという視点よりも、教員になることを目標においたうえでの反省や意欲とした方が適合すると考えられる。また、「特支インターン」は、特別支援学校か小学校かの学校種までを含めた進路選択のための機会として役立てることの意義も大きい。

そこで、本項目は、「ｽ 進路に対する目標と課題を明確にする」と変更する。着目点として「教員を目指すうえでの反省、今後への意欲」「教員の楽しさ、やりがいの再確認」「目指す教員像、教員に必要な資質の把握」の3点があげられる。

ｾ 地域や保護者との連携の重要性を理解する

「登校時に保護者とコミュニケーションを取っていた。登校と下校の方法がちがう場合もあり、連絡を取り合うことが大切である」との記述からわかるように、特別支援学校では登校時に教員と保護者が直接顔を合わせ情報交換する様子がみられ、登校時は教員と保護者の連携の必要性に気づくことができる重要な場面である。特別支援学校においては特に保護者との連携、家庭の協力が重要であり、「家庭と連携することで一人一人の子どもにじっくり深く寄り添うことができ、家庭の協力を得ながら子どもたちのために支援することが可能になる」といった理解に達している記述もみられる。このように登校時をはじめとして、全般的に特別支援学校における家庭との連携の重要性をとらえている記述がみられるが地域との連携は触れられていない。

そこで本項目は、「ｾ 保護者との連携の重要性を理解する」と変更する。

4 まとめ

これまで検討してきた結果をまとめると、「特支インターン」の「活動目標-自己評価の項目」は**表3**のようになる。古市・伊藤（2020）で達成度の低かった項目は、ｴ、ｶ、ｷ、ｸ、ｹ、ｽであり、これらはすべて変更している。その他の項目についても特別支援学校に適合するように表現や内容を変更した項目は下線で示している。

表3　活動目標-自己評価の項目

ｱ 特別支援学校の教員として働くことの意味や意義を考える
ｲ 学校における教員の役割に対する理解を深める
ｳ 教員の特徴的な職務に対する理解を深める
ｴ 児童生徒への指導のあり方について理解を深める
ｵ 児童生徒の理解に努める
ｶ 学級の環境づくりに関する理解を深める
ｷ 特別活動の内容を理解する
ｸ 授業の内容や方法に対する理解を深める
ｹ 実践的な指導の方法を経験する
ｺ 学校現場の雰囲気を感じる
ｻ この実習で得た体験を今後の活動に活かす
ｼ 教育実習に向けた課題を見つけ、意欲を高める
ｽ 進路に対する目標と課題を明確にする
ｾ 保護者との連携の重要性を理解する

また、これらに「活動の着目点」を加え「活動目標－自己評価シート」（**資料1**）として作成した。

古市・伊藤（2020）の自己評価では、達成度の低かった「特別活動」「生徒指導」などの項目も、「活動報告

書」の記述を分類してみると、一定の学びが得られていることが明らかとなった。今回、これらの項目を特別支援学校に適合する内容になるよう修正を加えたこと、また、事前に「活動目標-自己評価の項目」と「着目点」を提示しておくことで、これらを意識的な活動が促され、学びの自覚も得られやすくなることが期待できる。

今後は、「評価シート」を活用した指導を進め、効果を検証していくことが課題である。

引用文献

中央教育審議会（2012）教職生活全体を通じた教員の資質の能力の総合的な向上方策について

中央教育審議会（2015）これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について

古市真智子・伊藤佐奈美（2019）特別支援学校教員養成における「特別支援学校教職インターンシップ」の実施報告と今後の課題 中部大学教育研究19，25-32.

古市真智子・伊藤佐奈美（2020）「特別支援学校教職インターンシップ」の意義と課題－小学校における学校インターンシップとの比較から－ 中部大学教育研究20，123-129.

峯村恒平・枝元香菜子・渡邉はるか・藤谷哲・山本礼二（2019）教員養成課程における「学校を体験する」活動の取り組みと成果－各大学へのアンケートの結果から「学校インターンシップ」に向けて－ 目白大学高等教育研究第26，81-88.

文部科学省（2010）生徒指導提要

資料１　活動目標－自己評価シート

特別支援学校教職インターンシップ　活動目標－自己評価　シート

学籍番号　　氏名

	活動目標－自己評価　項目	着目点	チェック ○△×	評価 1~4
ア	特別支援学校の教師として働くことの意味や意義を考える			
イ	学校における教師の役割に対する理解を深める	・児童生徒の自立、生活の質の向上を目指した支援・指導		
		・児童生徒の成長を促すための活動・感情の共有		
ウ	教師の特徴的な職務に対する理解を深める	・日常生活の補助・介助		
		・教材教具、補助具等の準備		
		・児童生徒の状態を常に把握		
		・教師間の連携の重要性		
エ	児童生徒への指導のあり方について理解を深める	・児童生徒が前向きに楽しく取り組めるかかわり方		
		・実態把握と個々に応じた指導の重要性		
		・信頼関係の構築の必要性		
		・過剰な支援をせず見守る姿勢の重要性		
オ	児童生徒理解に努める	・個々の違いへの気づき		
		・児童生徒が達成感を得られる適度なサポートの判断		
		・接し方に対する困惑、模索		
		・積極的なかかわりの結果としての関係性の構築		
カ	学級の環境づくりに関する理解を深める	・子どもの実態に応じた学習環境づくり		
		・教員－子どもとのクラスの雰囲気づくり		
キ	特別活動の内容を理解する	・学年・学級活動（他の科目、活動との複合的なものを含む）		
		・学校行事		
		・課外・クラブ活動		
ク	授業の内容や方法に対する理解を深める	・わかりやすい教材の工夫		
		・子どもの関心を引く指導方法の工夫		
		・授業内容の工夫		
		・習熟度別、特性や能力に合わせた内容・工夫		
		・教科、領域、各教科等を合わせた指導の特徴に関する理解		
ケ	実践的な指導の方法を経験する	・効果的で適度な支援・指示のあり方		
		・補助・介助等の技術		
コ	学校現場の雰囲気を感じる	・登校時の雰囲気		
		・教員、児童生徒の雰囲気		
		・教育方針		
		・特別支援学校の特色に関する情報、知見、感想		
サ	この実習で得た体験を今後の活動に活かす	・今後の活動への意欲		
		・自分自身の成長の実感		
シ	教育実習に向けた課題を見つけ、意欲を高める			
ス	進路に対する目標と課題を明確にする	・教員を目指すうえでの反省、今後への意欲		
		・教員の楽しさ、やりがいの再確認		
		・目指す教員像、教員に必要な資質の把握		
セ	保護者との連携の重要性を理解する			

表 2 抽出された「学び」の記述と分類

ｱ 教師の意味や教員として働くことの意義を理解する

・実習を重ねるにつれて、人が生きる意味、障害者が生きる意味を考えるようになった。これからも考え続けていきたい

ｲ 学校における教師の役割に対する理解を深める

①児童生徒の自立、生活レベルの向上を目指した支援

・社会で自立して生活をする能力の育成に重点を置いている

・全て介助するのではなく少しの介助でできることを目指し、自立支援をする

・生徒の些細な成長や日々の変化を観察し、新たな支援を模索する

・一人一人の障害の程度に合わせそれぞれが生活レベルを向上させることを目指している

・挨拶の徹底、社会的自立を果たすことができるよう指導をする

②児童生徒の成長を促すための活動・感情の共有

・実習中の立ち仕事では、教員も座ることなく見本を示していた 〔作業学習〕

・実習中の立ち仕事では教員も座ることなく、大変なことを共有して信頼関係を築いている〔作業学習〕

・生活や活動を教員も一緒に楽しみ、子どもを褒めて伸ばす

ｳ 教師の特徴的な職務に対する理解を深める

①日常生活の補助・介助

・毎朝教室への付き添い、体温計測を行った

・スクールバスや保護者送迎の出迎え前に必要に応じて車いすや歩行器の準備をする

・食器の片付けでは、指示を受ける前に行動した〔給食指導〕

・摂食指導、移動、トイレなどの観察や補助を体験した

②教材教具、補助具等の準備

・音楽でうまく音が鳴らせるように楽器のセット、子どもと一緒に絵の具を付ける活動などを体験した〔音楽〕〔図工〕

・歩行器の準備ができた 〔自立活動〕

③児童生徒の状態を常に把握

・児童から常に目を離さず、どこにいるのか、何をしているのか把握することが必要

・生徒が何をしているのかを把握する必要がある

・子どもの小さな変化にも細心の注意を払うことが信頼関係につながっている

・教員が多くの子どもの様子を気にかけ、調子を把握し、対応を考え、個々に合った対応をしていた

④教員間の連携の重要性

・発作時の教職員の動き、役割分担、連絡について学ぶことができた

・子どもの成長を考えて小学部から高等部の教員間のコミュニケーションが必要

・問題解決には、幅広い視野で物事を把握し、教員間の連携が重要であった

・事前の打ち合わせ、子どもの情報共有など教員間の連携の重要性を感じた

ｴ 教師が行う児童・生徒指導に対する理解を深める

①児童生徒が前向きに楽しく取り組めるかかわり方

・子どもとの距離の取り方がわかった

・子どもとのかかわりについて教えてもらった

・できることを伸ばすかかわり方、前向きに取り組めるようにする働きかけを先生方を見て学んだ

・子どもたちが前向きに取り組むことができるようなかかわり方や声かけの難しさを痛感した

・先生方が楽しそうにしていると、自然に子どもたちも楽しそうな表情に変化することが多く、「楽しく学ぶ」ことの必要性を感じた

②実態把握と個々に応じた指導の重要性

・児童がどこまでできるのかを把握することの大切さを教えてもらった

・障害のある児童生徒とかかわるうえで、個々の実態把握が重要である

・生徒の実態を把握し、理解したうえでそれに応じた指導する必要がある

・生徒個々の実態に合った支援の仕方、コミュニケーションの取り方を学ぶことができた

③信頼関係の構築の必要性

・子どもたちの成長のためには、障害や性格、特性などを把握し、信頼関係の確立が必要

・支援をする前に子どもに声をかけることが信頼関係の構築に必要と教わった

④過剰な支援をせず見守る姿勢の重要性

・支援は必要なときに必要なことだけを教えることであり、何が必要かを考えるために実態把握が大切だということがわかった

・支援しないことが自立につながるということもあると学んだ

・適切な支援を行い、「できる」という体験を大切にする

・ゆっくり見守る姿勢を理解した

・各々のペースを大切にしながら身支度をする〔着替え補助〕

・教員が多くの手助けや準備をするのでなく自分でできることは自分でする指導をしている

・踊る活動では手をもって振りを教えたり、橋渡りでは応援したり見守ったりしていた

ｵ 児童・生徒理解を深める

①個々の違いへの気づき

・生徒個々に集中力やスピードに差がある 〔作業学習〕

・力加減や一人一人に合わせた支援が全くわからなかったが、たくさん考えることができた〔自立活動〕

・同じ障害でも違う特徴があり、子どもに合った対応（声かけや支援の仕方）を学んだ 〔朝の会〕〔生活単元学習〕

・子どもの興味を引く教材・教具、ゲーム性を持たせた教材など、個々の実態に応じたアイデアや発想が大事

・子どもにより知識や技能はさまざまで、考え方や表現の仕方、行動への移し方など大きく異なる

②児童生徒が達成感を得られる適度なサポートの判断

・子どもたちが自分でできることとサポートが必要なこととの判断の難しさを実感した

・自分でできることとサポートを必要とすることとの判断が難しく、手伝いすぎてしまうことがあった

・児童生徒に手を貸すことと子どもが自らの力で行うことについて、個々の能力に応じた支援がつかめず過剰に手を貸してしまうことが多かった

・自分でできたという達成感を味わわせることが自立につながると教えていただいた〔着替え補助〕

・出来たことを褒める、達成感が児童の成長や次の活動につながると感じた

③接し方に対する困惑、模索

・どのようにかかわったらよいかわからない（自分からかかわる）

・障害のある子どもと接することがなかったのでどのように接すると良いのかわからなかった

・子どもの感情が分からず、結局答えは分からなかった

・簡単なはずのコミュニケーションが取れず戸惑った。現実を目の当たりにして「支援を必要としている子ども」というのを理解した気がする

・生徒の意思を尊重したいと思うばかりで、意思をうまく受け取ることができなかった

・挨拶、着替え、荷物整理など、子どもたちができない理由を考えた〔日常生活の指導〕

④積極的なかかわりの結果としての関係性の構築

・活動に自信がない子どもや準備ができていない子どもに声をかけ、絵を描いたり趣味の話をしたりしている子どもに積極的に話しかけた

・一人一人と真摯に接することで言葉を発しなくても何を考えているのか分かるようになる

・初めは話が続かず馴染めなかったが積極的にかかわることで信頼関係を築くことができた

・どのように接すればよいかわからない部分もあったが実習を重ね自分なりに向き合うことができた

・実習の中で一緒に遊ぶ機会が増え、子どもたちの特性を知り「なぜ」が解消されるようになった

・児童生徒に自分からかかわることで関係が築ける

・子どもが不安になったとき個々の性格に合わせ言葉を選んで声をかけたり見守ったりして良い関係を築くことができる

・どのように接すれば良いのかわからなかったが、実習を重ね少しずつ子どもたちの個性や性格がわかり、私なりに向き合いかかわることができた

・生徒とどのように接すれば良いか分からなかったが、実習を重ね少しずつ生徒の個性を感じ取ることができ、生徒と向き合いコミュニケーションを取ることができるようになった

・初めてでどのように接して良いか戸惑ったが、日を追うごとに一人一人の子どもへの対応の仕方がわかってきた

・積極的に生徒とかかわりながらどこが課題なのかを常に考え、接したことでコミュニケーションをとれるようになってきた

・かかわりの中で表情の変化を見ることができ、楽しいと思えやりがいを感じた

・人見知りする子と打ち解けられた

・初めは覚えてもらえなかったが、後半は会う度に笑顔で声をかけてきたり、抱きついてきたりして嬉しかった

カ 学級経営に関する理解を深める

①子どもの実態に応じた学習環境づくり

・普通科・商業科、通常学級・重複障害学級では一日の流れや授業の内容、教室の環境が異なっており、在籍する子どもに合わせて環境が整えられていた

・普通学校と比べて安全配慮や環境整備など多くの配慮が行われていることを学んだ

②教員－子どもとのクラスの雰囲気づくり

・児童生徒と先生方が楽しそうに接し、言葉で伝わらない分雰囲気でコミュニケーションを取っていた

・先生同士の連携が大切。担任・副担任・介護員のそれぞれの目から子ども理解に努めることがクラスの良い雰囲気作りにつながる

キ 特別活動の内容を理解する

①学級活動（他の科目、活動との複合的なものを含む）

・身体活動、ボウリング、ダンスなど身体を動かす活動を取り入れていた

・全校で体力作りに取り組んでいた 〔朝の活動〕

②学校行事

・授業の集大成として学校行事（○○フェスタ）に授業での学びが取り入れられていた

③課外・クラブ活動

・障害者のスポーツ（ボッチャ）体験。車いすに乗って体験し難しさを感じた

・ボッチャはとても頭を使い、仲間との協力も必要な素晴らしいスポーツであることがわかった。車いすに乗って投げるのは動きが制限されて投げにくかった

・ボッチャは力の加減が難しかった。障害の有無にかかわらずスポーツを通して人とかかわり仲間ができることは豊かな人生を構築していく上で重要だと思った

ク 教科指導に対する理解を深める

①わかりやすい教材の工夫

・家庭科ではだれでも使える（分かりやすい）教材が工夫されていた〔家庭科〕

・視覚的支援、意欲的に取り組むための教材が参考になった

・一人一人の目標を子どもが自分で設定したり、手先をまんべんなく使用する教材を考え工夫することを知ることができた

・道具や教具の工夫が多く見られた（バドミントンのラケット、農耕用スコップなど）

・数を数えるときにスマートボールを用いたり、個人が獲得した点数を色つき磁石で数えたりしていた

・情報共有の大切さ、それぞれの個性を考えながらの教材づくりなど貴重な体験ができた

②子どもの関心を引く指導方法の工夫

・集中力が途切れたときに注意するのではなく、歌や会話などで「楽しい」と思える環境をつくり取り組めるようにする

・子どもの興味のあるもの（音楽や絵本）を取り入れている

・音楽を取り入れることで楽しく学ぶことができることがわかった

・足に絵の具を塗って感覚的な刺激を受けながら作品作りに取り組んでいた。教員が積極的に声をかけ楽しく取り組んでいた。華やかな色合いの工夫もあった。

・問題解決に積極的でない子には遊びを取り入れる

・児童の反応や視線から本人の使いたい色など意思を読み取り制作活動をした

③授業内容の工夫

・学習の内容は生活に関連付け、社会で生活する上で必要となることについて行っていた

・授業内容を工夫し、生徒に「できる」という達成感を味わわせることが前に向かって学ぼうとすることにつながると感じた

・毎週決まったプログラムで子どもたちの習慣づくりをしている。歩行練習の前には体操などで動機付けを行っていた

・安全に配慮した授業づくりをしていることを知った。生活から授業までどのように学ぶのかを徹底して見なければならないと思う

④習熟度別、特性や能力に合わせた内容・工夫

・aスタディ～c スタディと習熟度別に学習グループが分かれており、それぞれのグループで実態がかなり違うことを知った

・スタディグループに分かれて授業が行われているが、障害の程度が違うので個別の指導計画の重要性を感じた

・スタディ別、一つのグループ内でも授業の内容が異なっており個人に合った教育が行われていることがわかった

・クラスによって授業の内容が違いたくさんの工夫の仕方を学ばせてもらった

・障害の特性に合わせてクラス分けをし、特性に合わせた工夫を見ることができた

・個人の能力に合った作業を行うことで能力の向上を促すことがわかった

⑤教科、領域、各教科等を合わせた指導の特徴に関する理解

・社会に出る前段階からしっかりと自分の役割を遂行し、報告し確認を受け、改善し次に進むサイクルで授業が進められていた〔工業〕

・工業や農業の授業で職業生活に向けた内容を経験することができた〔工業〕〔農業〕

・縫工、窯業、流通・サービスの授業内容を知ることができた〔縫工〕〔窯業〕〔流通・サービス〕

・工業の時間を通して生徒はさまざまな技能や就職してからの態度を学習していく。担当された部分を責任を持って取り組むことで信頼を獲得し、仲間関係を築いていく〔工業〕

・工業、窯業を体験させてもらった。一般ではやらない授業を体験させてもらった〔工業〕〔窯業〕

・進路週間など、高等部におけるキャリア教育について学んだ

・体操や動作の練習は子どもの身体への認識に有効だとわかった〔自立活動〕

・四つん這いなど色々な身体の動かし方を真似させ刺激を与える〔自立活動〕

・障害の度合いに応じたプログラムを設定し行う。子どもの成長に応じた内容になるよう小学部から高等部までの連携が必要不可欠〔自立活動〕

・腕を伸ばして書く補助をする。曲に合わせて指先や手足など普段動かしてない部分を触ったり、ボールなどを使ったりして身体を伸ばす運動をする 〔自立活動〕

・自立活動や作業で、決められた課題を確認、手が止まっている子への促し、進路の学習では質問をして子どもの考えを出すなどの支援ができた〔自立活動〕〔作業学習〕

・子どもによって課題が違う。特徴や性格に応じた支援が必要〔生活単元学習〕

・生活単元学習や国語での学習補助では、学習の内容や補助の仕方を学んだ〔国語〕〔生活単元学習〕

・生活単元学習や音楽は障害の特性によって習熟度別のグループに分けずに授業を行っていた〔生活単元学習〕〔音楽〕

・一人一人に合わせた指導の重要性〔作業学習〕

・作業学習や算数の学習の中で子どもの補助をしながら一緒に行った〔算数〕〔作業学習〕

・高等部の作業学習で生徒達の挨拶が印象的だった〔作業学習〕

・個人のスキル向上だけを目的としているのではなく、周囲との連帯や挨拶など社会の一員として自立するための訓練の場でもあると感じた〔作業学習〕

・朝の準備では握る動作などの練習ができ、自立につながる 〔朝の準備〕

・給食前の顔のマッサージ、食後の歯磨きを体験した〔給食（日常生活の指導）〕

・具体的に行動を促す声かけ、魚を砕く、偏り無く食べるために食器を回すなどの支援をした〔給食・排泄指導〕

・渡すタイミングや切って渡すなど子どもによって工夫が必要であることがわかった〔給食指導（摂食）〕

・個々の特徴に合わせた指導を行っていた。偏食が激しい子には色々な物を食べられるように食べる順番を指示していた〔給食指導（摂食）〕

・食材を食べやすくカットしたり、持ちやすい道具を使って食べられるようにされていることがわかった〔給食指導（摂食）〕

・教室移動から朝の会までの行動を見守る。途中で注意がそれないよう必要に応じ声かけを行う〔日常生活の指導〕

ケ 実践的な指導力を醸成する

①効果的で適度な指示・支援のあり方

・個人に合わせた声かけ、スピード感。こだわりの強い児童との距離感。月曜日が苦手な子どもには朝からの活動の流れをつくったり、一人一人のかかわり方を学んだりすることができた 〔朝の学習〕

・声のかけ方、支援の仕方を学んだ

・もう少しでできそうな子、挫けそうな子には手を貸すのではなく、声かけや待つ時間が大切だと学んだ

・自立するという観点から待つ時間が重要だと気づくことができた

・始めは子どもに指示が通らなかったが指示がとおるようになった

・身振り手振り、表情や声の抑揚など非言語コミュニケーションを用いて接することができた

・子どもの視界に入り、やるべきことを描いて指示すると伝わりやすいといったさまざまなかかわり方を学んだ

・反応しない、反抗するときの声のかけ方、タイミングを学んだ〔着替え補助〕

・発達の段階、障害の様子からスモールステップで支援する大切さ、子どもの成長を考えられた
・できることはやらせるが、できないことは補助する。できないこともできるようにするためにどこまで補助が必要なのかを学ぶことができた
・児童とのかかわり方について学んだ。やってはいけないことをしたら叱り、できるようになったら一緒に喜んだ

②補助・介助等の技術

・補助具の使い方、体(筋肉)について学ぶことができた
・身辺介護の細かな留意点を知ることができた
・車いすの押し方、生徒の意思を尊重しつつ授業を工夫してスムーズに進めるコツ、側臥位にする際気を付けることなど一からたくさん考えることができた
・抱きかかえる際の注意、トイレ介助の際の転落防止、起立状態でのヘッドギア装着などは命を守るための配慮であることがわかった
・車いすの操作は筋力体力が必要だとわかった。目をつむった状態で車いすを押してもらうのは体感が早く不安であることや、声かけの重要性がわかった
・車いすの体験では、押してくれる人とのコミュニケーションの重要性を身をもって体験した
・施設設備の整った中で車いす体験をしたが、スロープは大変だった。街中の設備も完璧ではないのでないかと感じた
・車いすに乗って移動、車いすを押す体験をし、怖さや声かけの必要を学んだ
・トイレ介助、身替えの見守りや介助の仕方を知った

コ 学校現場の雰囲気を感じる

①登校時の雰囲気

・一日の始まりはスクールバスで登校する生徒を出迎え、教室に一緒に行くこと
・下駄箱の前で子どもを迎え、あいさつで多くの生徒と交流をした
・朝の挨拶で一日が始まる。保護者と話をする
・児童を出迎え、教室まで一緒に移動する
・バスを降りてきたら手をつないで学年ごとに集まって教室に移動する

②教員、児童生徒の雰囲気

・質問に対して丁寧に受け答えしてくれ、細かな対応がとても嬉しかった
・子どもたちに対し明るく元気に振る舞う先生が多い
・自分でやれることが少なく辛い毎日を送っているのではないかと思っていたが、まったくそのようなことはなく、毎日とても楽しそうに過ごしていて、私が元気をもらった
・生徒は真剣に取り組んだり、仲間で協力したり、一生懸命な姿がたくさん見られた。先生も生徒も明るく元気な人たちで楽しく実習ができた
・教員間の連携の強さが印象的だった

③教育方針

・礼節(挨拶の指導)を重んじる姿が見られ驚いた
・挨拶にとても重点を置いている。廊下ですれ違う時、掃除のときなど挨拶を欠かさず、社会で生活する力を重点として指導していることがわかった
・やってもらって当たり前でなく「ありがとう」が言えるように指導する

④特別支援学校の特色に関する情報、知見、感想

・一日の生活の流れ、授業の内容、生活場面での支援の内容を知った
・朝のスクールバスでの登校から帰りのスクールバス・事業所の車への送りまでの一日の流れが分かった
・学校生活の様子を観察し、子どもの具体的な実態や教職員のはたらきについて理解を深めることができた
・2クラスから4クラス合同で活動することが多く、他のクラスの児童とのかかわりがもてた
・子どもたちのサポートや授業準備を経験した
・習熟度別のグループ学習が行われており、授業ごとに教室の移動があるので移動時は一緒に移動した
・授業や作業などを介助することは想像を絶する大変さがあった
・移動やトイレ一つ一つに気を配り、常に子どもたちの気持ちで補助することの大切さを学んだ
・掲示物や水道の低さ、下り坂の後のクッションなどは車いすに乗って始めて配慮に気づいた
・小学校から特別支援学校中学部に転入してきたり、隣接の病院に入院のあいだのみ在学したりとさまざま。学区外からの通学児童生徒もいることを知った
・特別支援学校に初めて訪れ、小・中学校との違いを知ることができた

サ この実習で体験したことを他の教職科目で活用する

①　今後の活動への意欲

・支援の方法や子どもとのかかわり方を今後の活動で活かしたい
・活動で学んだことをどう活かしていくかを考え、今後につなげていきたい

②自分自身の成長の実感

・知的障害のある子ども達とかかわる経験はとても良い経験になった
・児童とたくさんかかわれ、任せてもらえたり、戸惑ったときにすぐ助けてもらえたりし、座学だけでは得ることのできない知識を多く得ることができた
・児童とかかわることにより自分自身も成長できた
・言葉のない子どもたちとコミュニケーションをとる経験が私自身の大きな成長になった
・大学の座学だけでは学ぶことができない部分も学ぶことができ、数多くの発見があった

シ 教育実習に接続する活動として学校現場をあらかじめ理解する

・同じ学校で教育実習を行うので、今回うまくできなかった体温計測を練習しておく
・実際の特別支援教育の教育現場への理解を深めた
・見守る・声をかける中心の支援になってしまったことが反省点。もっと周りをよく見て、身体誘導ができるように改善する
・インターンシップを糧に来年の教育実習につなげていきたい
・教育実習の前に行かせていただき、良かったと思える充実したインターンシップだった

ス 自らの教員としての適格性を把握する

①　教員を目指すうえでの反省、今後への意欲

・特別支援教育に関する知識不足を痛感。実習で学んだことを活かし、学習を進めたい
・たくさんの事を学んだ一方、自らの至らぬ点、これから磨き上げたいスキルなども具体的に知ることができ、今後に活かしていきたい
・意識の低さを指摘され、社会人としての自覚をもって子どもの前に立つ教員として成長するために、多くの学びを活かしていきたい
・自分の知識不足を感じるとともに、特別支援学校の様子を近くで体感でき充実した時間を過ごせた

②教員の楽しさ、やりがいの再確認

・多くのことを学んだし、何より子どもと触れ合う楽しさを感じた
・回を重ねるごとに子どもたちの性格が分かり、ふれあう機会が増え、一人一人と向き合いたいという意欲が大きくなった
・毎週の実習で生徒とかかわり笑顔になるのを見て、この職の素晴らしさを体感した
・先生方のかかわりや働きかけが勉強になった。子どもたちの表情の変化に楽しさとやりがいを感じた
・3年1組の子どものように日々学んでいく姿勢を大事にしていきたい

③目指す教員像、教員に必要な資質の把握

・高等部での実習だったが、小学校から高等学校へのつながりや見通しのある教育ができるようになりたい
・インターンシップで学んだことを活かして日々の勉強に励み実習校の先生のような教員になりたい
・先生方のように深い愛情を注ぎ、子どもの自信を育めるような教員を目指す
・教員として学級担任をもつことがあれば、自分の固定観念に囚われず、柔軟に子どもを受け入れられるような教員になりたい
・特別支援学校の教員は、生徒個々の実態把握や支援の仕方など正しい知識をしっかりつけ、間違いを決して起こさないように日々努力・勉強することが最重要であると感じた
・全生徒の些細な変化に気づけるように注意深く観察することが重要だと気付いた
・大人数へ目を行き届かせることが得意ではないので、一人一人にじっくり向き合える特別支援学校の指導にあこがれを感じた
・コミュニケーションをとることの難しさと大切さに気付いた

セ 地域や保護者との連携の重要性を理解する

・登校時に保護者とコミュニケーションを取っていた。登校と下校の方法がちがう場合もあり、連絡を取り合うことが大切である〔登校時〕
・保護者との関係構築、情報交換の必要性〔登校時〕
・家庭と連携することで一人一人の子どもにじっくり深く寄り添うことができ、家庭の協力を得ながら子どもたちのために支援することが可能になる
・教員－家庭の連携が印象的。子どもの情報を細かく共有している

Proposal of Self- Assessment Items for "Internship for Teachers at Schools for Special Needs Education"

FURUICHI Machiko*1 and ITO Sanami*2

*1 Associate Professor, Department of Contemporary Education, College of Contemporary Education, Chubu University

*2 Professor, Department of Contemporary Education, College of Contemporary Education, Chubu University

Abstract

This department provides an "internship for teachers at schools for special needs education" as an extracurricular activity. This article reports the progress of creating a self-assessment sheet in the course of this activity.

Based on the characteristics of schools for special needs education and the outcome of study by students, we examined "the activity's goals - self-assessment items" as well as "the activity's focuses." As a result, 14 items were proposed as "the activity's goals - self-assessment items," including 〈1. Considering the meaning and significance of working as a teacher at a school for special needs education〉, 〈2. Deepening understanding of a teacher's role at a school〉, 〈3. Deepening understanding of the overall duties of a teacher〉, and 〈4. Deepening understanding of how to provide instruction to students〉. In addition, each item of "the activity's focuses" including "Support for the independence of students and improvement of living standards" and "Sharing activities and emotions to accelerate the growth of students" was shown. Using "the activity's goals - self-assessment items" and "the activity's focuses," a self-assessment sheet unique to the "internship for teachers at schools for special needs education" was created.

Key words

Self-Assessment - Items, Internship for Teachers at Schools for Special Needs Education